第１８回　ちゅうでん教育振興助成（平成３０年度）

報告書資料　一般 － ８９

学校名・団体名	奈良女子大学附属中等教育学校
コ　ー　ス	学校支援
活動・研究のテーマ	２つの伝統文化の比較から持続可能な社会を考える

〈活動・研究の意義および活動報告〉

１．実施計画に至るまでの経緯

中学校学習指導要領では、第１章の総則において伝統と文化の尊重が挙げられており、これは次期学習指導要領でも継続して大切に扱われている内容である。また、文部科学省の日本ユネスコ国内委員会による ESD（Education for Sustainable Development）の基本的な考え方の中でも「世界遺産や地域の文化財等に関する学習」が取り上げられている。伝統文化を授業化することは、単に地域の伝統を知識として知ることではなく、これまで持続してきた技術や環境、また社会的条件を分析することで、伝統となり得た条件を考え、さらには持続可能な社会を生み出す手がかりを見つけるという視点を持たせることができると考えた。

本校では ESD をテーマにした「世界Ｉ」という総合学習を実施している。これは中学３年生を対象に、学際的な領域を横断的・総合的に学習し、持続可能な未来社会の構築のための考え方や方法を身に付け、現代社会のさまざまな課題を自らの課題として設定し、異質な他者との関係の中で自己の生き方を考える資質や能力を育成することをねらいとしている。その中の一つの講座として寄木細工の伝統について学ぶ授業を展開している。

奈良東大寺の正倉院の宝物に見る寄木細工は奈良木画と呼ばれ、奈良時代にシルクロードを伝わり天平文化の技術の粋として語られる。しかしその後、平安京遷都と共に衰退し、正倉院研究が行われ始める明治時代から再現という形で継承されるにとどまっている。一方有名な神奈川県箱根の寄木細工は東南アジアを経由し、江戸時代に石川仁兵衛によってその技法が完成され、五街道整備と共に発展し、現在も伝統工芸として息づいている。一説に同じ中東アジアに源流があるとされ、同様の木材加工技術を用いる奈良木画と箱根細工との比較分析は、伝統として継続されてきた技術、歴史、人、モノ、環境の分析題材として非常に興味深い題材となり得ると考えた。工芸家から直接講演を受ける機会や、本物に触れながら製作体験をし、プレゼンテーションを行うことを授業に取り入れ、より生徒の深い考察へと結びつける授業を実施したいと考えた。

２．活動時期および内容

＜４月～９月＞

世界Ｉは担当する４人の教員が各クラスに対して３時間の授業を順に行う。伝統文化をテーマにした３時間の授業内容は次の通りである。

（１時間目）　奈良木画と箱根寄木細工

箱根には平安時代から恵まれた広葉樹の木材資源を用いた木工技術があった。小田原城（一部に浅間神社）が作られる折、全国から優れた大工が集められ、小田原・箱根の地に住み着いた。江戸時代、東海道の整備により箱根は山越えの宿場町として栄える。箱根細工はお土産物としてヒット商品を産み出していく。一方奈良木画は平安遷都共に奈良の地から優れた木工技術は途絶えてしまい、明治時代からその復元作業として復活した。

生徒は奈良木画についてインターネットを用いて調査するが、数項目しか検索結果が得られないことに気付く。次に箱根寄木細工について調査すると、その歴史や製作方法、また通信販売など多くの情報がインターネットに溢れていることに気付く。奈良木画と箱根細工は共通の木材加工技術を用いて製作するにも関わらず、まったく違った扱いになっている。これらの違いをひも解くために、箱根寄木細工の歴史と環境に着目し、職人の現状については現地での聞き取りの様子を教員から補足した。

（２時間目）　　寄木細工の体験

箱根寄木細工を取りあげたテレビ番組は多い。寄木細工へ関心を高めるために動画の視聴を行った。次に実際に寄木細工の製作体験を行った。実際に作ることにより、生徒はより寄木細工の技法が理解でき、関心が高まった。

（３時間目）　　文化の伝承と持続可能な社会

３回の授業のまとめとして、文化が伝承される条件をグループで考え、出た意見を共有した。例として奈良に伝わる伝統食文化について考えた。例えば奈良には「三輪そうめん」「奈良漬け」「柿の葉寿司」「吉野葛」などの伝統食文化が存在するが、食べたことのない生徒は多い。これらの食文化を持続させるための方法をグループで話し合った。そうした取り組みから「持続可能」の意味や条件を考え、ESD の視点から世界に視野を広げた。

＜１０月～２月＞

さらに探究活動を続けたい選択生徒（約３０名）を募集し、寄木細工の新たな開発などのグループ活動を行い、伝統文化の未来に向けた提言を含む発表を行う。

寄木細工理解のヒントとするため、奈良国立博物館で行われる正倉院展において奈良木画を見学した。奈良木画では象牙や鹿の角、銀といった木材以外の当時入手できた最高の材料も用いられている。これらを用いた細密な加工を実際に目にし、生徒の興味はさらに高まった。

次に箱根細工を購入し、商品の計測や分解によって分析を行った。特に箱根細工の最高傑作と言われる「秘密箱」は、からくりを用いた幾何学文様に囲まれた箱で、手順を知る者だけが開けることができるため当時は金庫の役割も果たしていた。このからくり技術を再現するために、生徒は時間をかけて分析し、その結果を元に、新たな寄木細工製品の開発に取り組んだ。こうした取り組みの中から、生徒は伝統をつなぐための提言を考えていった。

授業の一環として、奈良工藝館において、館長であり、奈良木画唯一の伝承者である坂本曲斎氏に講演をいただく機会を得た。インターネットではわからなかった奈良木画の歴史や箱根細工と微妙に違う製作技術などを生徒は知ることができた。

これらの探究活動を経て、パワーポイントなどを用いながら発表の準備をし、それぞれのグループから発表を行い、自己評価、他者評価を行った。

３．成果と次年度への課題

中東アジアに源流を共にする２つの伝統文化が、遥か東方の日本という小さな島国で出合うということにロマンを感じる。今日の学校教育の中で「伝統」を取り扱う時、ややもすれば「地域文化を知る」または「安易な工芸体験」に終始し、本来目標とすべき「持続可能な社会作り」や「文化の創造」という視点が扱われていないのではないかと考えている。本授業では２つの伝統について技術、歴史、人、モノ、環境などから多角的に比較・分析し、さらに製品の開発を実際に行うことで、伝統文化への多角的なアプローチを行い、ESD の視点を養う授業となった。教師からの説明で済まさず、工芸家から直接講演を受け、本物を手に取りながら製作体験を伴った授業を行うことで、生徒はより深い考察へと結びつけることができたと考えられる。

今年の授業では生徒はヒノキとマホガニーという２種類の木材を使って２色の寄木細工を製作したが、さらに多様な色を用いることが寄木細工の魅力である。これらの材料を用いることや精度の高い工作道具の準備で、さらに生徒の興味・関心が高まるであろう。